

Green Grow the Tresses-O

1965

By Stanley Hyland

緑の髪の娘

目
次

訳者あとがき

解説 横井 司

262

268

5

主要登場人物

アーサー・サグデン	西ヨークシャー州ラツデン警察	警部
シドニー・トードフ	刑事	
クレイヴン	部長刑事	
ハウ	部長刑事	
ハリス	部長刑事	
ヒュー・ウォーバートン	本部長	
ブリッズ	警視	
ボナー	警察医	
ライトフット	巡査	
ジーナ・マツツオーニ	イタリア人の工員	
ウォルター・ハースト	寮の管理人	
hana・ハースト	ウォルターの妻	
ジヨゼフ・ブランスキル	紡織工場経営者	
ユワート・ハイディカー	工場の染色場監督	
リチャード・デンビー	公共図書館館長	
ポール・ニクソン	航空機会社社員	
レンズ	合衆国空軍大尉、警備警察部長	
ジヨゼフ・カリノフスキ	航空兵、無線通信士	
フランク・トードフ	シドニーの兄	
マルプラケ	役人	
マーカス・ピアス	情報局員	
クリストファー・パリスター	情報局員	
フォーカス	古書販売人	

緑
の
髪
の
娘

本書は愛をこめて妻に捧げる。謎を解きほぐすときも、わかつた謎を作るときも、彼女は実際に力になつてくれた。

Veritas per se placet

honestata per se decent:

Falsa fucis, turpia

phaleris indigent

真実は心を喜ばせる、なぜならそれは真実であるから。

高潔な行為はよいものだ、なぜならそれは高潔であるから。

だが嘘には化粧が

悪行には装飾が必要だ。

（十六世紀、エラスムス収
集の「ことわざ集」から）

著者注

西ヨークシャー州工アデール地方にラッデンという場所は実在しない。本書の登場人物もまた架空の人々である。

第一章

「やだ！ 誰か来て、これ、見てよ」

アリス・ローソンの声が紡織工場の節玉修繕場

(器具で節玉等を取り除く工程)

の騒音を切り裂いて響いた。

彼女は脂じみた仕事台の傾斜面に身を乗り出し、織りむらや傷はないかと、検査していた布地をしげしげと見ている。洗いざらしの緑色の上つ張りが大きな尻を覆つて突つ張り、じっと動かない姿は岩のようだ。

「信じらんない」口をへの字にして言い、それからふと思いついたかのように、「うそ！」と三音高くして言い足した。いきなり一步下がったので、隣の台のサン德拉・ソーントンは骨盤を仕事台にしたたかぶつけた。サン德拉の悲鳴には耳も貸さず、アリスは手にした砲金製のピンセットで、灰色がかかった布地に金の針金のように織り込まれた、長い、細い、明るい一本の線をつついた。「う・そ・つ！」一字ずつ区切って、低く繰り返した。

隣の織り場の織機の音が古い漆喰壁のひび割れのあいだから漏れてくる。リズミカルに一定のテンポで響く音は、ホットなジャズのダブル・ベースのようだ。二十ヤード離れた、二階下の中庭からは、コードスの散らばった敷石を踏みしめる足音、指示を出す男の大声が聞こえる。羊毛起重機のディーゼル・エンジンが荷の重さに轟音を上げる。

節玉修繕場の中を奇妙な沈黙が支配したが、その静けさを破つて、油を塗った木の床板をこすつて後ろに引かれる椅子の鈍い音、ぱたぱたとうサンドルの音がして、二十人の女たちがアリスの仕事台のまわりに集まってきた。サンドラ・ソーントンは骨盤の痛みを忘れていた。

「なによ、アリス」彼女は言つた。「黄色い木綿糸がちよつと混じつたつていうだけじゃ……」「冗談じゃない！」木綿糸なんかじやないわよ！」

「あれが木綿糸だとしたら」エルシー・ウイットフィールドは言つた。「肉の切れ端に縛りつけてある」

「それも、新鮮な肉じゃない……」

ぎこちない笑い声が上がり、また静まつた。若い娘の一人はくすくす笑つてから、お上品に指三本を口に押し当てて声を殺した。

「ミセス・ヘンダソンはどこ？ 見てもらつたほうがいいわよ」サンドラ・ソーントンは布のその部分を指でそつと触つてみたが、そのときドアがバタンとあいて、隣の織り場からカタンカタンと動くシャトルの音が流れ込んできた。ドアは重さ二ポンドの鉄塊を紐に下げたおもりに引っ張られ、また大きな音を立てて閉まつた。織機の騒音はふいに薄れ、背後で控えめにリズムを刻んでいるだけになつた。

ミセス・ヘンダソンが人をかき分けてアリスの仕事台に近づいてきた。がつちりしたブラジャーで高々と押し上げられた胸は、あたかも海草を分けて進む碎氷船だつた。

「なんなの、アリス？」

「あんなの、ですよ」

「取り除けばいいでしょ」ミセス・ヘンダソンは怒鳴るかわりに、ささやき声で言った。

アリス・ローソンの薄い唇は酸っぱいものでも噛みしめるように動き、歯が小さくかちりと鳴った。彼女は両手を上つ張りのポケットに深く突っ込んだ。「いやです。自分でやつてください」

二十秒間、誰も動かず、誰もしゃべらなかつた。それから人の群れの後ろのほうで、興奮した甲高い声が上がつた。「おしゃべりジニー。きれいに結つた髪も、あれで台無し！」すると、そうだ、そうだ、そ

うだ、という低い小声がしばし続いた。
ミセス・ヘンダソンは下唇を噛み、小さくうなずきながら身を乗り出して、張り伸ばした布をじつと見た。色染めしていないサージの中央に、明るい金色の髪の毛が十数本、長い一束になつて織り込まれている。その片方の端には、茶色くごわごわした皮膚と肉がこびりついていた。

[訳者]

松下祥子（まつした・さちこ）

上智大学外国語学部英語学科卒業。訳書にアガサ・クリスティー『パディントン発4時50分』、ジャック・オコネル『私書箱9号』、レジナルド・ヒル『午前零時のフーガ』（以上早川書房）、グラント・アレン『アフリカの百万長者』、サッバー『恐怖の島』（以上論創社）他多数。

みどり　かみ　むすめ
緑の髪の娘

——論創海外ミステリ 181

2016年10月25日 初版第1刷印刷

2016年10月30日 初版第1刷発行

著 者 スタンリー・ハイランド

訳 者 松下祥子

装 画 佐久間真人

装 丁 宗利淳一

発行所 論 創 社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1574-9

落丁・乱丁本はお取り替えいたします